2018/6/17中原キリスト教会礼拝

ヨブ記42:1-6

　　　　　　　　　　　　　「**ヨブは慰められた」**

今日はヨブ記からです。お読みいただきました聖書の箇所は、ヨブ記の最後の章の最初のところであり、ヨブの神様への最終応答のところです。ヨブ記は不可思議な書物であり、その中でも本日の箇所は不可思議のクライマックスのようなところです。ヨブ記の内容を簡単に振り返ります。まず、神様はヨブに苦難を与えることをサタンに許可します。最初の内は、ヨブは「わたしたちは、神から幸福を頂いたのだから、不幸もいただこうではないか」として信仰深い立場を堅持していました。しかし、サタンの試みはエスカレートして行き、遂にヨブは我慢ならず、自分の生まれた日を呪い、神様に不条理を抗議する姿勢に転じます。ヨブを慰めようとやって来た三人の友人は、交互にヨブを諭します。「神様から苦しみを受けるのは罪を犯したからに違いない。心から神様に立ち帰るなら、幸いが回復するだろう」と言います。神様に立ち帰る、ということは悔い改める、ということです。常識的には、大変信仰深い友人達です。これに対し、ヨブは「断じてあなたたちを正しいとはしない。死に至るまでわたしは潔白を主張する」と答え、神様に対しては、抗議し続け、自分に直接答えることを要求する姿勢を貫きます。とうとう、神様はヨブに現れ、全能の力を持って神様はこの世界を統治していることを示します。また、怪物のようなものについても神様の支配下にあることをヨブに示します。モーセと同様の神顕現にあったヨブは、神様の支配を受け入れ、神信仰に立ち帰ります。その転換の告白の場所が42章1-6節です。そして神様は、ヨブの友達たちに対し、「お前たちは、私について私の僕ヨブのように正しく語らなかった」と言い、怒りを示します。ヨブが燔祭による執成しを行い、友人は神様の罰から逃れることができました。他方、ヨブについては、当初以上の幸いを回復いたします。ハッピーエンドの安映画のような終わり方ですが、とにかく、すべて「よかった、よかった」、と言ったところです。しかし、根本的な疑問が残ります。あれだけ強い抗議をしていたヨブはなぜ大転換したのでしょうか。42章6節でヨブは新改訳聖書では「悔いた」、新共同訳やカソリックの訳では「悔い改めた」とされていますが、何を「悔い改めた」のでしょうか。友人が当初から言っていたように、罪を認め、悔い改めたのでしょうか。では、正しいはずのことを言っていた友人がなぜ叱られ、ヨブが正しい、とされたのでしょうか。伝統的には、「ヨブは神様に高慢な自己義認の言葉を吐き、それを深く悔い改め、神様は悔い改めによる立ち返りを「良し」とせられ、幸いを回復された」と、理解されてきました。それなら、なぜ、ヨブは正しい、とされたのでしょうか。矛盾しています。

ヨブ記の最初にヨブはウツの地の人間とあります。「ウツの地」は正確には不明ですが、哀歌4:21に「ウツの地に住むエドムの娘よ。楽しみ喜べ。 だが、あなたにも杯は巡って来る。 あなたも酔って裸になる。」とありますので「エドム」地域にあったものと推測されます。エドムは死海の東南であり、異邦人の地です。系譜的にはイサクの兄エサウの子孫ということになっています。ヨブ記に登場する友人たちも所謂異邦人です。三人はそれぞれテマン人、シュアハ人、ナアマ人とされています。テマン人というのはエドム人のことです。シュアハ人はアラビヤと関連し「東の地」の出身と考えられています。ナアマ人は北東アラビヤの地と関連しているのではないか、と推測されています。また三人の友人のあと、エリフという人物がでてきてイスラエル正統神学の考えからヨブを批判しますが彼はブズ人と言われています。北部アラビヤの三部族の一つの出身とされています。エリフという名前はヘブル的ですので彼の出身地はヘブル文化の影響があったのかもしれません。いずれにしろ、ヨブを含め登場人物はすべて異邦の地の出身です。死海からアカバ湾にかけての地域です。三人の友人やエリフはイスラエルの正統的神学にのっとったことを言っているのになぜ、異邦人ばかりの物語りになっているのでしょう。ヨブのように「義人の苦難」という解きがたい疑問を投げかける物語はユダヤ教の正統的伝承としては不適当と考えられたのでしょう。ユダヤ教社会ではこのような不遜な疑問を提示すること自身がいわば禁句であったのだと思われます。異邦人の物語りという前提で初めて正典聖書に入れられた文書でしょう。しかし、この疑問は万国共通の疑問であり、ユダヤ教が支配している社会においても裏でささやかれていた疑問であることは当然です。一般論で議論しているうちは良いですが、実際、大変な苦難に置かれた人々から見れば「叫び」です。ホロコーストの大災厄にあって死に臨んだ人たちはどうだったのでしょう。他国の事ではなくても東北大震災の原発事故で避難し、結局、離婚となり、子供を育てているお母さんの「なぜ私にこんな苦難が---」と問われて、我々はなにか言えるでしょうか。言葉を失います。人間の歴史はこの疑問との格闘の歴史であった、と言っても言い過ぎではないでしょう。

最初にもうしあげたヨブが神様への抗議の姿勢から、神に従う信仰を回復するに至る経緯をヨブ記にそってみてみましょう。27章から31勝までヨブは自分の正当性の主張をし、神に対する抗議をいたします。これを聞いたエリフという人物がヨブを批判します。32章から37章まで続きます。33:12以下には「聞け。私はあなたに答える。 このことであなたは正しくない。 神は人よりも偉大だからである。/なぜ、あなたは神と言い争うのか。 自分のことばに 神がいちいち答えてくださらないといって。/神はある方法で語られ、 また、ほかの方法で語られるが、 人はそれに気づかない。」とあります。38章に入り、突如として神の声がヨブに臨みます。そして最後に、もう一度「主はさらに、ヨブに答えて仰せられた。/非難する者が全能者と争おうとするのか。 神を責める者は、それを言いたててみよ。」という言葉がヨブに投げかけられます。40:1です。すると、40:3で「ヨブは主に答えて言った。/ああ、私はつまらない者です。 あなたに何と口答えできましょう。 私はただ手を口に当てるばかりです。/一度、私は語りましたが、もう口答えしません。 二度と、私はくり返しません。」と神に述べます。最初に主の言葉がヨブに臨み、主の世界支配が述べられている間、ヨブの大転換が用意されていった、と解釈されます。ついで主の第二論述が発せられます。40:6から41章の終わりまでです。獣、鳥、魚などが少々笑いを誘うように描かれます。

この一連の流れの中で、まず疑問が起きるのは、あれだけ激しく神に抗議していたヨブが、あっさり折れて、神への従順をとりもどしたように見えることです。神の宇宙的支配の言葉がヨブに謙遜さを取り戻させたようです。本当にそうでしょうか。自分にひきよせて考えてみてもなにかしっくりきません。ポイントは主のヨブに対する最初の言葉です。38:1「主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。」とあります。これを見て思い出すのはモーセが十戒を戴く時の神との出会いです。出エジプト記19:3です。「モーセは神のみもとに上って行った。主は山から彼を呼んで仰せられた。「あなたは、このように、ヤコブの家に言い、イスラエルの人々に告げよ。」とあります。主の顕現です。主の声が直接、モーセに、ヨブに与えられたのです。神が、「主」ヤハウェ―の名で立ち現われた、ということです。主がヨブに顕現したと言うことは、今、ここに主が共にある、ということです。世界の創造者であり、その初めから今に至るまですべてを支配している主なる神が、ともにいらっしゃる、ということです。これが「神共にいまして」インマニュエル、です。主の霊がヨブを蓋うのです。そこには主の恵みが満ちていて、完全なる平安があります。マタイ福音書11:28「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしの所に来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」とおっしゃられる主が私のそばにおられるのです。これが苦難の中で神に抗議の叫びをあげていたヨブが静かになり、自らの高慢さを恥じるようになった理由です。主なる神との平安がヨブの怒りを完全に静めたのです。人間は大きな力を見せつけられたからと言って、心が転換することはありません。すべてを包む何かに触れた時、心は変わります。これが「神との平和」シャロームです。神の愛の結晶部分と言うこともできるでしょう。この怒りから平安への転換が、42:1-6で再確認されているのです。

42章6節の「悔いる」「悔い改めた」と訳されている部分をもう少し詳しく見てみます。

この言葉はヘブル語では「ni:ham」という言葉です。ヨブ記ではこの言葉が7回使われていますが、ここだけは他の箇所と異なる変化形です。他の箇所は、「慰められる」と訳することで問題はありませんが、この箇所の使用法は複雑です。ニファル形といいます。伝統的には「悔い改める」とか「悔いる」と訳されてきました。英語では「repent」です。新共同訳、新改訳初版は「悔い改める」であり、口語訳、新改訳3版は「悔いる」です。辞書をみると、極めて多様な意味が挙げられています。「申し訳ない」「悲嘆にくれる」「同情する」「悔（くや）む」「悲しむ」「嘆く」という訳から、「救われた」「楽にする」「慰める」「慰められる」「和解する」という訳までが挙げられています。他の箇所と同様の「慰められる」の意味もあります。研究書によりますと、このニファル形ni:hamの基本的な意味は、negativeな心の状態からpositiveな心の状態に変わる、というところにある、ということです。その結果、この言葉の訳として、「考え直します」とか「改め、転換します」という訳も出てきました。では、なにが、ヨブをしてそのような転換を可能にさせたのでしょうか。ヨブ記における神様の回答の言葉を読んでいきますと、この世に発生するすべてのことは神様の見守りの下にあり、自分もその一部であることが感じられます。安心感に包まれるようになります。そうです、神様の恵みがこの世を覆っており、苦難の状況にある時こそ神様は愛をもって見ておられ、時が至れば介入される、という約束がある、と言うことです。ヨブはこの恵みにより神様の回答の中に、「慰めの約束」を見ることが出来たのです。

ここに至りますと、マタイによる福音書における山上の説教の一節を思い出します。「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」とあります。ここでの「悲しむ者」はヘブル語ではa:be:lと言いますが、「慰められる」はni:hamです。この二つの単語が同時に使用されている箇所を旧約聖書で探しますと、ヨブ記第29章第25節、イザヤ書第61章第2節、エレミヤ書第31章第13節が出てきます。ヨブ記のところは、ヨブが嘗て神様に守られていた時、「私は嘆く人を慰め、彼らのために道を示してや」った、といわれているところです。「嘆く人を慰めた」という形で出てきます。イザヤ書の箇所は山上の説教の原型が示されている、ところとして有名なところです。「主が恵みをお与えになる年、私たちの神が報復される日を告知して、嘆いている人々を慰め」る、と言われています。主が嘆いている人々を慰めてくださる、というのです。最後のエレミヤ書のこの箇所も新しい契約が与えられることを予言した有名な箇所です。「その時、おとめは喜び祝って踊り、若者も老人も共に踊る。私は彼らの嘆きを喜びに変え、彼らを慰め、悲しみに代えて喜びを祝わせる」とおっしゃられています。「嘆きを喜びに変え、慰め、悲しみを喜びに変える」と言うのです。ヨブ記のni:hamに示された、「嘆く者」、「悲しむ者」が「慰められる」という約束は、預言書から発し、旧約の中でこだまし、主イエスの山上の説教において結実している、と見ることができるでしょう。ヨブのような「苦難」「嘆き」「悲しみ」の中に在る人には必ず「慰め」が与えられるという約束を主がされている、ということです。それ故、「悲しむ」人は「幸いだ」なのです。「悲しむ」人こそ「慰め」を得ることができるのです。

　実は、ヨブ記にはもう一点、疑問が起きる表現があります。最後のところでです。42:7-8です。「さて、主がこれらのことばをヨブに語られて後、主はテマン人エリファズに仰せられた。「わたしの怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かって燃える。それは、あなたがたがわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったからだ。/今、あなたがたは雄牛七頭、雄羊七頭を取って、わたしのしもべヨブのところに行き、あなたがたのために全焼のいけにえをささげよ。わたしのしもべヨブはあなたがたのために祈ろう。わたしは彼を受け入れるので、わたしはあなたがたの恥辱となることはしない。あなたがたはわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったが。」とあります。なぜヨブが「真実」とされ、友人たちは「真実」を語っていない、とされたのでしょうか。友人たちの言っていることをみると、神信仰の見地から見て決して間違ったことは言っておりません。むしろ褒められるべき信仰と言ってもよいかもしれません。一つだけ、エリファズの言うことを見てみましょう。ヨブ記22:21以下です。「さあ、あなたは神と和らぎ、平和を得よ。 そうすればあなたに幸いが来よう。神の御口からおしえを受け、 そのみことばを心にとどめよ。あなたがもし全能者に立ち返るなら、 あなたは再び立ち直る。 あなたは自分の天幕から不正を遠ざけ、宝をちりの上に置き、 オフィルの金を川の小石の間に置け。そうすれば全能者はあなたの黄金となり、 尊い銀があなたのものとなる。」とあります。見上げた信仰と言っても良いかもしれません。この点は難問です。私自身、確たる答えを持っている訳ではありませんが、「こういうことだろう」ということを申し上げさせていただきます。

　まず、ここで「真実」と表現されている言葉のことです。いくつかの訳を見てみます。新改訳が「真実」と訳しています。口語訳や新共同訳は「正しい事」です。カソリックの代表的な訳であるフランシスコ会訳も同様です。言葉そのものはヘブル語で「neko:na:」という言葉でこれは「ku:n」堅く立つ、安定している、長く続く、というような意味の言葉です。堅く立っている、から「正しい」、「真実」というニュアンスが出てきている、と理解できます。用例を見ますと、旧約聖書での用例が216回で、NIVという英語訳でみると、確立した、用意された、という意味が大部分です。3回だけ「正しい」の意味で使用されています。ヨブ記で2回ありますからあと1回ですが出エジプト記8:26です。

新約聖書はギリシャ語で書かれていますが、そのヘブル語訳というのが中世に書かれたものであります。そこで「堅く立つ」「真実」「正しい」の意味の「neko:na:」をみると5箇所で使われています。本来の「neko:na:」の意味から、多様な意味で使用されています。この言葉が本来の「堅く立つ」から多様な意味の言葉として使用されていったことが見て取れます。新改訳で「真実」と訳されたのは「正しい」という意味のヘブル語は別にあり、tsedaka:という言葉ですが、旧約聖書では最重要語ですからそれとの混同を避けるという意味で「真実」と訳されたのだと思います。しかし「真実」も別の言葉があり、混同されることはさけられません。いっそのこと「堅く立つ」という本来の意味から直訳造語で「堅立」という言葉でも作りたくなります。いずれにしろ、「neko:na:」という「堅く立つ」「正しい」「真実」と訳される言葉が使用されている、ということです。

どうも、ヨブ記で想定している「信仰的態度」はイスラエル伝統神学での「信仰的態度」とは異なるようです。ちょっと違う角度から、この問題をみてみます。旧約聖書で神様を表現する言葉としては大きく言って2通りがあります。「elohi:m」と「yahawe:」です。

ヨブ記でのこの二つの神表現を見てみると、1,2章と42:6以降の所謂散文部分では「yahawe:」が、3章から42:5までの詩文部分では「elohi:m」が使用される、という区分けができます。従って、友人が神信仰を語るときは「elohi:m」なのです。詩文部分であっても神が語られるところでは「主」（yahawe:）が使用されています。38:1の「主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。」のような使われ方です。散文部分は神様が語られ、ヨブが聞き、応答する時の神様は「yahawe:」即ち、イスラエル人の神の名です。このことからヨブ記においては一般論として神信仰を語るときは「elohi:m」、対話の相手としての神にはその名「yahawe:」が使用されている、ということです。超越的な全能の神について述べる時は「elohi:m」、「汝と我」の関係が神と人の間に成立している時は「yahawe:」が使用される、ということです。対話があるときは名前で呼ぶのは自然です。よく「主なる神」という言い方をします。新改訳では「神である主」と訳されています。これは「yahawe:、elohi:m」と２つを続けた表現です。「yahawe:という名の神」ということです。

対話の相手方としての神・ヨブの関係があるときは神の名yahawe:が使用されている、ということです。そしてこのような関係にあるときに「信仰に固く立っている態度」とヨブ記は見做している、ということです。あの神に抗議し、悪たれを言っているとも見えるあの態度が信仰的とされているのです。この態度を「悔いて」謙虚な態度になったことを神信仰に固く立った態度である、と言われているのではないのです。友達との対比でみるとどう考えてもあの詩文においてヨブが友達の批判に対し、“それはおかしい、神が理不尽なのだ”と叫んでいるあの態度を信仰的と評価しているのです。

これは、神様に抗議し、自分の正当性を主張し、頑固に友人の言うことを否定したあの態度を是としている、しかも神の前に「堅く立った」態度である、と言っているのです。どう理解できますでしょうか。私は、このヨブ記の言っていることはすべてを神様にぶつけなさい、包み隠したり、冷静を装ったり、「すべて主のなすがままに」などというもったいぶった態度をとったり、自分の欲しいも正直に言わなかったり、他人を恨んでいるのを黙って居たり、要するに、神様に対し真実の自分をさらけださない、態度は、大きな罪であり、信仰的態度ではない、ということです。どのような回答が示されるかは神のなせる業ですから、私、あなたは、我がままでも良い、恨みつらみでも良い、とにかく何でも祈りの中で申し上げねばならない、ということです。自分が誤っていればいつか示される時が来ます。祈りはその意味で「真実」でなければならない、ということです。新改訳の翻訳もその意味と再理解すると「なるほど」と思わされます。自分をごまかすのが最悪です。神様にごまかしは通じません。そうなら最初から「真実」を申し上げればよいのです。詩篇におけるダビデの祈りを見てください。大変赤裸々なことが記されています。敵に対する呪い、神様に疑問をぶつける祈り、等々です。こうみてくるとヨブ記での信仰もイスラエルの底流に流れる信仰の正統的流れにあることが理解できると思います。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、主を礼拝する時をお与えくださいましてありがとうございます。本日はヨブ記のなかから学びました。大きな苦難の中にあったヨブに対し、「慰められる」と約束された神様の恵みを知ることができました。それがイエス様の「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」という御言葉に繋がっていることも知りました。私たちに、慰めの約束を信じる信仰をお与えください。苦難に中に在る兄弟姉妹に主の慰めが与えられますように、お願い申し上げます。我らの主、イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）